

大阪・関西万博への疑問

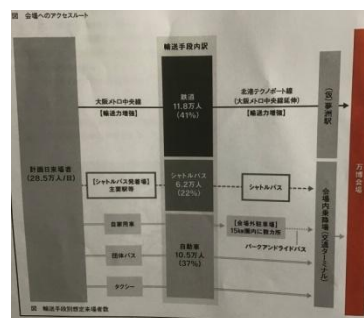
2025 年日本国際博覧会環境影響評価準備書が縦覧され、博覧会協会による説明会も開催されている。説明会では夢洲懇談会や大阪自然環境保全協会など団体や市民が意見を述べたが、事業者である協会からは内容のないような回答が続いたという。事業者として、市民の意見や提案にしっかりと向き合い、万博を開催していく姿勢があるのか。

分厚い準備書をコピーして読んでいくと、気になる箇所、問題点がいくつも出てくる。写真は準備書の図 1.2.3 会場の完成イメージである。昨年 12 月に公表された万博基本計画に掲載されたイメージ図だ。「大屋根」(ループ)に囲まれたところが、密度の高い「パビリオンワールド」で、主要施設として参加国のパビリオン施設などが立ち並ぶようだが、参加国は想定の 3 分の 1 ほどで、どうなるかは不透明である。会場計画は生煮えであり、こんな曖昧な計画で環境影響評価が適正に行えるのか。生煮えの計画だからこそ、しっかりした追加の調査に基づく環境影響評価が求められる。



ここでは、準備書の第 1 章「事業計画」の 2 点にしぼり問題点を指摘したい。準備書 5 ページで、万博の想定入場者数は約 2820 万人、計画日來場者は 28.5 万人/日としている。これにより会場計画、会場への輸送手段別想定来場者数などが設定されている。

万博計画の前提といえる想定入場者数は、環境影響評価を左右するものであり、その積算根拠を示すべきだ。過去の万博などを参考にしたというが、1970 年大阪万博や 2005 年愛知万博のころとは、時代は様変わりしている。



とりわけ新型コロナウイルスの世界的な感染拡大、パンデミックは東京五輪・パラリンピックにみられたように、国際的大規模イベントの見直しを迫っている。2820 万人という想定入場者数は、コロナ危機を踏まえたものなのか。コロナ危機を踏まえた想定入場者数の精査、万博の規模縮小を求めたい。

もう一つ指摘したいのが、会場計画の「大屋根」(リング)である。大屋根の上は展望回廊で、ウォーターワールドで「海の広場」などを作り出すなどとしている。会場完成イメージ図でひとときわ目立つ「大屋根」は 350 億円もの巨額の建設費がかかり、会場建設費増額をもたらした。準備書 6 ページで「原則として建物は会期終了後に敷地から撤去される予定であり、比較的簡易な仮設構造とする計画である」と書かれているが、大屋根も同様と考えてよいのか。「大屋根」が半年間の会期終了後に撤去されるなら、350 億円というコストはあまりに巨額すぎる。比較的簡易な仮設構造とするなら、安全性が懸念される。万博会場計画のなかでも、まずは「大屋根」の再検討を求めたい。

(2021 年 10 月 22 日)